

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 塩 崎 勉 会員数 約 65,000 名）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

平成 20 年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）では、リスニング・テストが導入されて 3 年目となるが、全国で 49 万 853 人の受験者がこの方式の試験に取り組んだ。高等学校学習指導要領（英語）では「実践的コミュニケーションの育成」に重点が置かれ、中等英語教育の現場では 4 技能と呼ばれる、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」を総合的に採り入れた授業形態が一般に進みつつある。この実践的な英語教育を推進する大きな流れの中で、センター試験へのリスニング・テスト導入が実現して 3 年目となる。想定される様々な困難を乗り越えて、この試験が実施されたことは、我が国の英語教育にとって画期的な事であり、日本人全体の英語力がこれによって向上することを期待させるほど有意義な試験であることには間違いない。

ただし、3 年目のリスニング・テストをふりかえって、昨年度と同様、I C レコーダーの不具合など大きな課題を残したことも忘れてはならない。49 万人に対して 216 人（読売新聞による。）という数は確かに非常に小さい数ではあるが、トラブルに巻き込まれた受験者にとっては、大学の合否、ひいては進路がこれによって左右されるという大きな動揺を与えたことは事実である。機械の故障は、よけいな負荷を負わせ、当事者に不公平感を抱かせてしまう。I C レコーダーに関するハード面での更なる改善を早急にしていただきたいものである。繰り返しになるが、センター試験でリスニング・テストが導入された意義は計り知れないものがある。若干の混乱はあったものの、英語教育界全体はリスニング・テストの実施を肯定的にとらえていることをここではっきりと申し述べておきたい。

本稿では、以下に今年度実施されたリスニング・テスト問題に関する意見と評価を記すこととする。全体として見れば、平均点は昨年度が 32.47 点で今年度は 29.45 点（昨年度比▼3.02 点）、100 点換算では 58.90（昨年度比▼6.04）であった。若干低めではあったが、問題構成の上では適切な内容であったと思われる。ふだん高性能な電子機器で音楽を聞き慣れている受験者のアンケートには、音声に反響する部分があり違和感を覚えたとの記述があったが、英語のリスニング試験のレベルで考えれば、日本語による問題指示、男女のネイティブスピーカーによる問題文・指示文の音声とも明瞭で、聞き取りやすく作成されていた。ちなみに、イヤフォンをカナル型（耳栓タイプ）に変えることにより、周囲への音漏れを防ぐと同時に周囲から入るノイズを削減する効果があることも指摘しておきたい。一方、音声の速度は日本の英語学習者には適切で、自然なスピードで話されていたことを評価したい。一般にはセンター試験ではもっとゆっくりと英語が読まれると予想していたものと思われるが、実際にこのテストを受けた受験者にはこのスピードがかなり速く感じられたのではないかと。2 回読みとはいえ、ネイティブスピーカーが自然なスピードで読む英文を聞いて、日本の英語学習者がほぼ 6 割近く（平均点）の内容を理解できることが明らかになったわけで、こ

れは素晴らしいことではないだろうか。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 短い会話を聞いて質問に合う答を選択肢(イラストを用いたものが多い)から選ぶ問題。

会話はすべて2往復(A-B-A-B)、内容も日常会話が多い。難易度から言えば、易しい問題と言えよう。放送が2回流れることの是非については、様々な議論があるが、結論から言えば同じ会話を2回流す現在の方針を支持する。そのように考える理由は、放送問題には日常の自然な会話には無い制約があるためである。ふだんの会話であれば、場面や状況、雰囲気や顔の表情など、会話の流れをつかむ要素が十分にあるが、音声のみを頼りとする放送問題では、それらの補助が得られないのである。更に短い会話であればあるほど1度だけでは脈絡をつかむことは難しい。この第1問では、会話をもとにかなり細微な情報を求める質問を与えていることも考慮すると、やはり現行のように2回流すべきだという判断にいたるのである。

第1問の内容だが、他の問題と比較して易しい設問が多いように思う。簡単な計算を必要とする問題も例年の2題から、今年は1題に減った。問4の掛け算と足し算の複合問題がこれに相当する。女性の2回目の発話(No, but I only have a twenty-dollar bill.)は、解答を導き出す上では関連がないが、この情報があるため混乱した受験者がいたのではないかと考えられる。また、地図を利用した問題では、すべての問いの選択肢が左から順に番号どおりに並んでいるのに対して、地図上の選択肢の並び方が、上から下へ左右に2行にわたり跳ぶように記されている。このことで単純なマークミスをした者もいるのではないかと懸念される。この第1問が今後どのような問題傾向となるにせよ、あまりに細かすぎる内容を求める難問や奇問だけは出題してほしくないと思う。今回の問題にはそのような内容は含まれず、標準的な良問と思われた。

第2問 対話の最後の発言に対する応答文を選び、対話を完成させる問題。対話はA-Bで終わり次のAを答えるタイプと、A-B-Aで終わり次のBを答えるタイプに分かれるが、どちらにしても短い対話である。難易度は一律ではなく、難しいものと易しいものを織り交ぜた出題となっているように思われる。7題中、最後の発言が疑問文で終わっているものは2題となり、問われているポイントが明瞭なだけに、これらが比較的易しい部類の問題となるが、基礎的な運用能力を試す重要な問題であり、今後、問題数が増加することを期待したい。他の5題では、最後の発言が平叙文で終わり、それを踏まえて話が展開していく形なので文脈をより深く理解していなければ答えられない問題である。問7は、短くて単純な対話のように聞こえるが、男性の発言に仮定法が使われており、しかもやや難しい表現(something came up)が直後に続いているため、一瞬の対話ゆえにかえって難易度を上げているのではないかとと思われる。この第2問では、以上の理由から実力の差が出やすい問題構成であり、今後もこの難易のバランスを考えた出題をお願いしたいと思う。

第3問 Aは対話を聞いてその内容(場面・状況など)を推測して質問に答える問題、Bは長めの対話を聞いて写真に写っている人物を特定するという問題構成である。

Aについては、対話の行われている場面や状況の推測、対話をしている人物の発言の意図や人物の今後の行動を予測するなど、実際のコミュニケーションをしていく上で必要な状況判断力や推測する力を測ることにあつた。今年度はいずれの問いも、最後の台詞がそれまでの話の流

れを踏まえて正答を導き出すための重要な鍵^{かぎ}となっており、問題としては非常に巧みに構成されたものであると言える。すべての内容を十分に把握した上で、最後の台詞を聞き逃すことができないこともあって、受験者は難しく思えたのではないか。

一方、Bは、位置関係や特徴を把握する上で比較的易しい表現が使われており、複雑な説明もなく流れも自然であり、比較的易しいレベルの良問であった。囲みの中の場面や問いが指示文と一緒に読み上げられれば、更に良いのではないかと思われる。

第4問 ここからは英文が対話文ではなく、モノログ（読み上げ文）となる。Aは短めの英文が3題読み上げられ、それぞれの内容に関する質問に対する答を選ぶ問題。Bは長めの英文が1題読み上げられ、その内容に関する質問が三つ与えられ、選択肢から答を選ぶ問題。Aの質問は主に概要把握をねらいとしていると思われる。細かい事実まで聞き取ることは要求されていないようだ。Bは注意して聞いていないと答えられない細かな質問もあり、また同時に選択肢の長い英文を読み取ることも要求されるなど、受験者には相当緊張を強いられる問題形式である。

今年度の問題について言えば、A Bともに内容は分かりやすく大変良い問題であったが、Aの読み上げ速度が若干速く感じられた。問20はラジオ番組のナレーションで、前述の第3問Aと共通するが、最後になって Mariah Carey ならぬ Maria M. が登場するため、2度目のリスニングで再度確認することを余儀なくされる。質問があらかじめ問題用紙に記されているものの、最後まで油断できない問いである。問21はリゾートの宣伝を聞き取る問題。最後の部分で予約が必要であることを聞き取り、正答を導き出すが、やはりこの問いも前問と同様、2度目のリスニングで確認を怠ることができない問題である。問22は美術館の開館時間を連絡する閉館時の放送に関する問題である。曜日により開館時間が異なるため、正答を導き出すためには、複数の情報を把握し、しかも時間の計算をすることが要求され、複雑で難しい問題であった。

Bは読み上げられる英文がやや長めになるとともに中身について3問の出題があり、質問内容も細かくなってくる。今回の出題はお土産にもらった小エピソードの話である。ふだんの生活の中でもあり得る話で、興味を持って聞くことができたのではないかと思われる。しかし、総語数が昨年度よりも多くなり、それに伴い読まれるスピードも標準以上であった。また、問23では、本文にある”brackish”と選択肢の”black”の発音が似ている上、形容詞”blackish”と酷似しており、”brackish”の意味が易しい英語で説明されているとはいうものの、語彙レベルが高いため誤答が多数出ると予想される。また、問24については、選択肢の英文が2行にわたるものが三つ、その1つは17語で書かれているが、これはやや長すぎるのではないか。リスニング・テストでは、英文を聞くのと同時に質問文や選択肢の英文を読み取る作業を伴うものが多くなってくる。人間の目で一度にとらえられる長さはせいぜい7~8語ぐらいであろう。10語を超える英文はなるべく避けるようにできないものだろうか。

3 ま と め

本稿ではセンター試験・「英語（リスニング）」を検討してきた。平均点は昨年度と比較してやや低くなったが、受験者には取り組みやすい内容であった。設問の間で難易度が均一ではなく、他の問題と較べてかなり易しいと感じる問題もあったことは否めない。受験者の中には、問題に答え

る負荷を考えると、配点が全て均一であることに対して不公平を感じる者がいるのは事実だ。今後、テスト形式とともに内容面での工夫に期待したいところである。

繰り返しになるが、センター試験においてリスニング・テストが導入されたことは極めて有意義である。英語の授業では、これまで以上に「実践的コミュニケーションの育成」に力が注がれることであろう。また、ネイティブスピーカーによる音声を自然なスピードにしたことは適切な判断であり、これから大きな波及効果が期待できる。これは今後、日本の英語教育においてリスニング力を測定する音声スピードのモデルとなる点でも意義があると思われる。